KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

南山淳・前田幸男編 『批判的安全保障論 — アプローチとイシューを理解する』（法律文化社、2022年、vii + 258頁）

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-09-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鶴見, 直人 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00008042

関西外国語大学 研究論集 第116号（2022年 9 月）
Journal of Inquiry and Research, No.116（September 2022）

南山淳・前田幸男編
『批判的安全保障論 ― アプローチとイシューを理解する』

（法律文化社、2022年、vii + 258頁）

鶴 見 直 人

最新（2022年 6 月末時点）の国際情勢を踏まえるまでもなく、近年重要性が高まりつつある安全保障分野の研究において、久しく欧米との間で蓄積において差のあった部分を埋めるのに不可欠なピースとなる一冊が出版された。国際政治学あるいは安全保障論への新機軸について日本語で学ぶことのできる画期的なテキストとなる本書に対し、些か平凡に過ぎる紹介となることを憂慮しつつも、まずはテーマや構成など概略から確認してゆくこととしたい。

書名でもある「批判的安全保障論」とは、国際関係論や国際政治学などの国際関係研究の一部門（ないし下位分類）にあたる安全保障論における、ある特定のアプローチを指す。国際関係論（international relations）を IR と略して学問分野（ディシプリン）の名称として使用するように、批判的安全保障論（critical security studies）もまた同様に CSS と表記される。CSS は、国家と軍事に特徴付けられる伝統的な安全保障論に問題があるとする点では共有するものの、このアプローチが定義づけを避ける嫌いがあり、一般化した定義に落とし込むことが難しい。ただ、本書を引用しつつ説明すれば、CSS とは「安全保障には、恐怖や不安全という感情を引き起こす契機についても、あるいは安全保障の目的と手段についても、あらかじめ決められた前提は存在しない」（ii）という研究姿勢（アプローチを取る研究者たち）から生み出される研究（の総体）と考えることができよう。比較的新しいながらも欧米などではすでに認知され定着しつつある一方、日本においては知名度も研究の蓄積も、そしてこのアプローチの研究者の数も決して多いとは言えない（これ自体が研究テーマとなりうる問題だが、本稿では注で触れるにとどめる）。もちろん、これまで CSS に立脚した研究書は刊行されてはきた。しかし、表題に（あるいは主題に）これを冠する日本語で書かれた教科書（テキスト）が出版されてこなかったのである。

この状況に一石を投じることとなる本書は、2 部構成をとっている。問題意識を示した「はしがき」と、批判的安全保障論の学問的な位置付けや本書の意義について説明する「序章」を踏まえて、アプローチを五つの章に整理した第Ⅰ部と、争点と事例について八つの章を揃えた第Ⅱ部からなっており、全十三章の構成となっている。各章のタイトルと執筆者名（括弧内）は以下の通りである。

はしがき（南山淳／前田幸男）
序章　批判的安全保障論とは何か（南山淳／前田幸男）
第Ⅰ部　アプローチ
第１章　社会構成主義と批判理論（五十嵐元道）
第２章　ポスト構造主義と国際政治社会学（前田幸男）
第３章　セキュリタイゼーション（大山貴稔）
第４章　ポストコロニアリズムと安全保障（清水耕介）
第５章　ジェンダー化する安全保障（和田賢治）
第Ⅱ部　争点と事例
第６章　環境と批判的安全保障――気候の危機からジオ・パワーへ（前田幸男／蓮井誠一郎）
第７章　保健と批判的安全保障――人命は防衛されなければならない？（前田幸男）
第８章　人間の安全保障論の現状と展望――政策と研究の交錯点としての人間の安全保障（古澤嘉朗）
第９章　経済安全保障――安全保障諸概念の深層へ向けた問いかけ（原田太津男）
第10章　グローバルな移民／難民問題と安全保障――移民／難民の境界線の画定と名付け（柄谷利恵子）
第11章　批判地政学と安全保障――地政学をローカルに考えて見えてくる世界の複雑さ（北川眞也）
第12章　テロリズムの夜明け、リアリズムの黄昏――拡散する例外状態（小林誠）
第13章　日米同盟／在沖縄米軍基地システムの中の沖縄――解放／承認としての安全保障（南山淳）
あとがき（南山淳／前田幸男）／事項索引／人名索引

この目次からも、欧米においてすでに一般化しているCSSをテーマとする先行して出版されている研究書や教科書が渉猟されており、それらの長所を継承していることが窺える。続けて本書の全体にわたって見られる長所を挙げるならば、それは多くの章に共通した特徴の一つとして例示の巧さを指摘できるだろう。恐らくは過去に学生へと上手く伝えられなかったもどかしさを、各々執筆者たちが乗り越えてきた経験を有しているが故のことであろうと推測され、ここに教科書として出版された本書に込められた工夫を見てとることができよう。

続けて挙げるなら（先行するCSS系を含めた多くのテキストでも採用されているが）、各章末の「設問」が目を引く。昨今の高等教育に強く要請されるアクティヴ・ラーニングへ向けた手引きに止まらず、学生と教員の間での活発な議論へと発展し得る刺激的なものが多い。

かような本書が画期的な一冊であることは、先行する書評からも伺える。三牧聖子（2022）は、「解放」や「ノン・ヒューマン」といった新しいCSSのキー・コンセプトが、異なる章を横断しながらもつながりを持っていることを指摘するなど、行間まで明瞭に照らしつつ本書に通底するテーマを浮かび上がらせている。その後を追う本稿では、紙幅の制限のため抄となるが第Ⅰ部の各章紹介と、さながら（行間とはまた違った）「章間」とでも呼ぶべき部分に意義を見

出してみたい。その後、本書の学界における位置付けを素描しつつ、最後に今日的な状況における本書を教育において活用することの意義について言及してゆこう。

各章の概要

南山淳と前田幸男の共著による「はしがき」と序章の「批判的安全保障論とは何か」では、世界情勢の変化に応じて対象とともに研究それ自体も刷新される必要性を示しつつ、本書の意義が展開される。CSS が興隆してきた学説史・学界史についても触れられてはいるが、本格的にこれらが整理されるのは、第Ⅰ部に入ってからである。なお、第Ⅰ部の「アプローチ」とは即ち CSS の安全保障問題への接近法であると同時に、CSS という知的姿勢へと向かってゆく進入路となることを意味するものと思われる。以下では主にこの部分を紹介したい。

５つに整理されたアプローチの筆頭を飾る第１章は「社会構成主義と批判理論」（五十嵐元道）と題され、この両者が IR ないし国際政治学、そして安全保障論に持ち込まれる過程が説明される。いわゆる「第３論争」において、世界をありのままに客観的に認識・分析する実証主義に対して疑義を呈したポスト実証主義のポイントが判りやすく説明され、続いて客観性というフィクションが暴かれた後に、更に根本的な問い直しを迫ったものとして CSS が位置付けられる。ここでは「批判理論」が異なる集団を指すことによって起きる誤解や無理解を回避すべくアプローチが３つに整理される。曰く、フランクフルト学派の方法論的立場、IR の批判理論、そして CSS におけるウェールズ学派であり、このうち本章では３番目について詳しい解説がなされる。

続く第２章（前田幸男）では、ソシュール、デリダ、フーコーを取り上げ、ポスト構造主義が安全保障研究へと流入し、そこで生じた変化と影響が説明される。これは国内／国際の境界線を相対化する知的営みへとつながり、その過程で国際政治社会学という議論の場が出現した。CSS による問い直しの思想的な背景と系譜を、本章からは学ぶことができる。

第３章（大山貴稔）では「セキュリティ」を問い直した学派が、アベリストウィス（またはウェールズ）学派、コペンハーゲン学派、そしてパリ学派に分けて整理される。中でもコペンハーゲン学派が、分析視角として「セキュリタイゼーション」を精緻化させた点が詳述される。既刊の本誌『研究論集』（岸野2021：198-202；小田桐2021：210）でも見られるこの分析視角についての説明として、今後本章が取扱説明書的な役割を果してゆくこととなるだろう。

第４章では、自身でも批判的国際関係学の要素をふんだんに取り入れたテキストを刊行している清水耕介（2001, 2003）の手で、ポストコロニアリズムと CSS との関係性が整理される。ここではＥ・サイードのオリエンタリズム、Ｈ・バーバのハイブリディティ、Ｇ・スピヴァクのサバルタンといった中核概念の説明と歴史的な展開を経て、ポストコロニアリズムの国際関係学との関係、そして安全保障との関係へと探求が進められる。ポストコロニアリズムの蓄積

を踏まえることで、安全保障が内包する西洋近代主義や帝国主義的な性格、そして国民国家を前提とした枠組みの存在が詳らかとなり、CSS を拘束する困難な課題が浮かび上がってくる。

ところで、ポストコロニアルな安全保障問題を抱える舞台の一つは太平洋島嶼国であろう。この地域の安全保障問題を取り上げたロニー・アレキサンダーによる研究（1992、1999）を忘れるわけにはいかない。国家と軍事に安全保障問題が集中することから、「小さく」「弱い」と見做される島嶼国について、その地の眼差しを踏まえ捉え直すことにより安全保障を相対化したわけだが、その際にもう一つ示したのがジェンダーの視点の導入であった。この系譜に連なるのが、第５章「ジェンダー化する安全保障」（和田賢治）となる。アレキサンダーが内発的安全を鍵概念に安全保障にまつわる視点の転換を説いたように、和田はホモソーシャルな国際関係の罠と向かい合うための対抗言説にケアの倫理を提示する。思うに、ここに示したような繋げ方が、本章の「設問」にある主体形成へ向けた課題に対する一つの応答となるかもしれない。

第Ⅱ部の「争点と事例」は編者らのこれまでの活発な知的交流を反映した執筆陣と見受けられる。第６章の「環境と批判的安全保障」（蓮井誠一郎／前田幸男）、第７章「保健と批判的安全保障」（前田幸男）、第８章「人間の安全保障論」（古澤嘉朗）、第９章「経済安全保障」（原田太津男）、第10章「グローバルな移民／難民問題」（柄谷利恵子）、第11章「批判地政学」（北川眞也）、第12章「批判的テロリズム研究」（小林誠）、そして第13章「日米同盟／在沖縄米軍基地システムの中の沖縄――解放／承認としての安全保障」（南山淳）は、いずれもこれまでに各分野で研究の厚い蓄積のある執筆者が、事例に則して CSS を実践した部分となる。

紙幅と評者の力量の制限から全てを等しく紹介できない点が悔やまれるが、いずれの章も近年の日本（そして世界）において問題とされながらも打開策の見いだせない難問に、新たなアプローチである CSS から鋭く切り込んでいる。したがって今後、教科書でありながらもその質は論文集として遜色のないこれら各章への応答がなされる必要があるだろう。それは、こういった不断の知的営為を通じてこそ、CSS はその真価を発揮し得ると考えられるためである。

本書の位置付け

以上が CSS について国内で出版される初の教科書の内容紹介となるが、ではこれが日本国内の学界でいかなる位置にあるものかへと話題を進めてみよう。もっとも、学説研究を展開するだけの紙幅が残されていないため、要点の素描にとどまることを予めお断り申し上げたい。

欧米においては国際関係研究の一角を占めている CSS が、日本において同様の状況にあるとは言い難い。それは日本国際政治学会における安全保障研究を網羅的にレヴューした泉川（2020）において、CSS への言及が一切見られないことからも明らかだろう。安全保障論においても、また IR ないし国際政治学からも等閑視されてきた結果、批判的アプローチに関して欧米との間で著しい差が生じていると考えられる。それは日本における国際関係研究とこの分

野における教育に関連した欠損とも言えるだろう。[1] 1990年代後半から2000年代前半に生じた空白を、ようやく埋めることができるという重要な役割を本書は担わされているのである。

もちろん、研究書としては2000年を前後して日本においても批判的IR／CSSの系譜は出現しており、それは土佐弘之の一連の著作を筆頭に挙げることができよう。嚆矢となったのは土佐（2000）だが、『安全保障という逆説』（2003）や『アナーキカル・ガヴァナンス』（2006）において批判的IRやCSSについての学説史的な紹介についても触れられている。[2] その後の動向は、例えば本書の執筆者の一人である小林（2016）の手によるものも参考となるだろう。

本書の活用に向けて

本稿の末尾に、蛇足となることを憚ることなく、本書が今日の教育において活用され得ると考える点について付記し、結びに代えたい。ウクライナにおける戦争が進行する状況も相まって、まさに伝統的な安全保障論の重要性が声高に叫ばれている今日だからからこそ、CSSについてもその学術的ないし研究上の意義の重要性を周知せしめる（逆説的な）好機となっている、と捉えられそうではあるが、それだけではない。ポイントは学生へのアプローチにある。

一般的に考えれば、新たにディシプリンを身につけるのならば時系列的に学説を修めることが王道となろう。ただし、多くの学生が研究者を目指すわけではない状況では、高等教育の課程が教養を深めることを目的に据えることとなっても、それは次善の策として悪手とはなるまい。この場合、政府か上役かを問わず、「上」からの決定に闇雲に従うのではなく、自ら考えて行動する（自らの意見を政府に付託するため、ともすれば国益の観点も踏まえながら将来を見据えた投票行動に出るといった）有権者の育成、あるいは「肯定的な懐疑心」（鶴見、小田桐、岸野 2020）の涵養などが目指されることになることが考えられる。

この時、CSSのような最新の知見を、今まさに起きている事例に突き合わせながら扱うことは、現代に学び将来を生きてゆく学生にとって、またとない刺激となるに違いない。もちろん、学問と向き合う以上、既存の知識の蓄積の踏襲が重要であることに疑問を挟む余地はない。だが、その一方で敢えてリープフロッグ型で（一足飛びに）知識を獲得する経路の可能性を否定しないことが、ここでの要点となる。ともすればIRをはじめとする科目では、初学者に対して高校までの世界史や政治・経済等の知識の習得（あるいは少なくとも履修していること）を前提としがちである。しかし、それらの知識がなくとも、発展編から始めることになろうとも、最新の学問分野の知を吸収し、そこから関心に沿って遡りながら見聞を深めてゆくという学修モデルもあり得るのではなかろうか。そのようなチャレンジにこそ本書は向いている。

いずれの場面においても、学修へ向けた前向きな心構えや、最低でも「学ぶ」とはどういうことかを理解していること――いわゆるレディネス（readiness）――を必要とするものではあるが、そこへとつなげる最初の一歩に向けても、CSSは役立ちそうである。既存の（国際）社

会の中に制度や仕組みの不合理さを感じることは、知的営為につながる刺激となるからだ。

スポイルされそうになる重力に抗して、興味を持つ方向へと学生の背中を押すにはどうしたら良いか。新たに学びはじめた学生たちは、素朴な感性を備えているからこそ「おかしい」と感じられる機会も多い。この時、CSS という常識を覆し、問題群の中核を暴き出すことに定評のあるアプローチは、興味を喚起するきっかけとして「嵌まる」可能性が決して低くない。そうであるならば、教員にとって慣れないアプローチでも、相応の準備が求められるとしても、学生と共に学びを深める機会となるだろう。講義や演習の規模にも、学生の興味・関心の度合いや強さにもよるだろうが、本書の刊行はこういった新たな挑戦の機会を、教える側にももたらし得るという点で、やはり画期となる一冊として位置付けられるのである。

注

1）振り返ってみれば欧米との間には少なくとも２つの看過し難い差が存在し、それらは方法論についての体系的教育と批判的視座からの研究であったと考えられる。先に前者がKKV の翻訳（キング、コヘイン、ヴァーバ 2004）などにより埋められ、類書としてヴァン・エヴェラ（2009）や川崎（2010）が続いたことも、ことによっては後者がさらに周辺へと追いやられた遠因として作用したかもしれない。方法論の輸入はIR の第二論争の系譜を引く科学的（あるいは定量的）手法と実証主義の立ち位置を強固にする方向に作用した。冷戦後の激変する日本の安全保障環境において、学界は政策オプションの供給源としてその存在意義を刷新しうる時期と重なったことは、研究を政策に近づける意味でも方法論教育の要請とは補完的な関係にあったと考えられる。かような事情などがおそらく一因となる中で、『国際政治』および『国際安全保障』等では批判的ないしポスト構造主義のアプローチの研究が看過され、結果蓄積と定着に至らなかったのではないかと推察される。

もちろん、教科書の一部において批判的ないしポストモダンIR やCSS が、例えば進藤（2001）、岩田ほか（2003）、山本（2009）、重政（2015）により紹介されることはあった。しかし、結果としては『ミレニアム』（*Millennium: Journal of International Studies*）誌や『国際政治社会学』（*International Political Sociology*）誌に類するような新機軸の学会誌が創刊されることのなかった日本では、この分野の研究はもっぱら雑誌『現代思想』や各大学紀要などに発表されることとなり、その結果、国際関係研究の世界へと新規参入しようとする大学院生（やそれを目指す学部生）たちは、特段のきっかけがない限りCSS の存在自体を知りえる機会を持てず、結果CSS を含む批判的アプローチと出会い損ねるしかなかったと考えられる。またここでは触れなかったが、もちろん教える側の問題や、ジョブ・マーケットの問題も考えられるが、これらは別の機会に検討しよう。

2）学説整理については（土佐 2003）に収録されてはいるが部分的に改変されているため（土佐 2001）にあたるのが望ましい。なお（土佐 2006）後に刊行されたものは以下のリストではやむなく割愛した。

参考文献

アレキサンダー、ロニー（1992）『大きな夢と小さな島々　―太平洋島嶼国の非核化にみる新しい安全保障観』国際書院。

アレキサンダー、ロニー（1999）「ジェンダーと安全保障　―何が問題か」納家政嗣・竹田いさみ編『新安全保障論の構図』勁草書房、54-79頁（第３章）。

泉川泰博（2020）「第一章　日本国際政治学会の安全保障研究」『国際政治』第119号、97-109頁。

岩田一政ほか編（2003）『国際関係研究入門［増補版］』東京大学出版会。

ヴァン・エヴェラ、スティーヴン（2009）『政治学のリサーチ・メソッド』野口和彦、渡辺紫乃訳、勁草書房。

小田桐確（2021）「近代欧州における同盟の変容と勢力均衡」『研究論集』114号、207-226頁。

川崎剛（2010）『社会科学系のための「優秀論文」作成術　―プロの学術論文から卒論まで』勁草書房。

岸野浩一（2021）「国際社会における制度の存在論的分析へ向けて　―言語行為と制度としての勢力均衡をめぐって」『研究論集』114号、195-206頁。

キング、G.、R・O・コヘイン、S・ヴァーバ（2004）『社会科学のリサーチ・デザイン ―定性的研究における科学的推論』真渕勝監訳、勁草書房。

小林誠（2016）「国際政治学の問題設定　―駆け抜ける権力をどう捕捉するか」『思想』第７号（第1107号）、24-40頁。

重政公一（2015）「批判的国際理論」吉川直人・野口和彦編『国際関係理論』（第２版）勁草書房、325-357頁（第11章）。

清水耕介（2002）『市民派のための国際政治経済学　―多様性と緑の社会の可能性』社会評論社。

清水耕介（2003）『テキスト国際政治経済学　―多様な視点から「世界」を読む』ミネルヴァ書房。

進藤榮一（2001）『現代国際関係学　―歴史・思想・理論』有斐閣。

鶴見直人、岸野浩一、小田桐確（2020）「時事問題と大学教育の公共性を巡る一考察　―国際関係論分野を例として」『研究論集』111号、179-192頁。

土佐弘之（2000）『グローバル／ジェンダー・ポリティックス　―国際関係論とフェミニズム』世界思想社。

土佐弘之（2001）「国家安全保障という制度的思考の揺らぎ　―ポストモダニズムとアイデンティティ／リスク」『法学』（東北大学）65巻４号、511-554頁。

土佐弘之（2003）『安全保障という逆説』青土社。

土佐弘之（2006）『アナーキカル・ガヴァナンス　―批判的国際関係論の新展開』御茶の水書房。

三牧聖子（2022）「南山淳・前田幸男編『批判的安全保障論　―アプローチとイシューを理解する』（法律文化社）を読む」『図書新聞』第3538号（2022年4月9日）、3-4頁。

山本武彦（2009）『安全保障政策　―経世在民・新地政学・安全保障共同体』日本経済評論社、2009年。

（つるみ・まさと　短期大学部准教授）